

五月二十五日

九時星の子愛児園現場、左官仕上げ指示。十時半まで。今日は晴れて左官の塗り壁の乾きが早い。デリケートな仕上げは曇りの日の方が良いのかも知れない。昨日は近藤理事長も現場に来て左官の仕事を楽しまれた。今は左官の仕事を眼の当りにするのも本当に珍しくなった。塗り壁特有の品格をわかる人が少なくなっただ。星の子愛児園は増築して、やっと私らしいモノになった。子供たちも喜んでくれるやも知れぬ。良質な左官の仕上げは時間と共に変化するのが良い。人間の皮フと同じように。新建材、工業化製品にはそれが無い。工業化製品、鉄、アルミ、ガラスとの組み合わせをもっと本格的に考えたい。十二時研究室。午後、銅版画刷り上がってきた。プリンターが上手だったのだろう。予想をこえてうまく刷り上がった。ときの忘れものギャラリーの秋の展覧会に向けてゆっくりと準備をすすめているが、銅版はもう少しやってみよう。室内、塩野君の尽力でちらしも出来たのでオリジナル版画の入った本も自分で売らなくては。予約価格三一、五〇〇円との事。知り合い諸氏は御用心、私と会わないようにせぬと売りつけられますよ。十八時星の子愛児園にて高山夫妻と会い、高山邸住宅に使用する素材を説明する。岡邸も見たいと言つ。

五月二十六日

七時起床。世田谷村八時四〇分発つ。十時調布現場地鎮祭。安

藤、渡辺、祭事出席。愛想の良い神主さんで「一尽の風と共に、ハイお神酒」だって。不動産屋の若者も出席したので、賃貸シアパート部の平面見てもらう。女性を主客に考えたいと言つことで彼の意見をとり入れてシアパート部北側玄関案でゆくことにする。若いのにしつかりした意見を言う人間がまだいるんだ。デザインズマンションは人気があるけど意外と住みづらくて早く出ていってしまう人が多いらしい。こういうのを現場の声って言うんだな。馬場さんのシアパートは厳しい予算だが、なんとか借り手殺到になるようにしてあげよう。十二時頃新宿、昼食は地下街のそば屋でせいろ。食事後少し時間が空いたのでコーヒーショップ・ユールカフェで休み、メモを付ける。次の銅版をどう彫るか案したりする。十三時四〇分森川、加藤と五反田待ち合わせ、TOC トモコーポレーション、新木場倉庫打ち合わせ。社長の中国での交渉の結果を聞くのが楽しみだが、このプロジェクトも金との闘いだな。銅版画製作の世界とはかけ離れた世界だが、よくよく考えてみれば私の銅版画だって売れなかつたらこの径は閉ざされてしまうのだから、同じことか。自分の銅版画のセールス用名刺を持ち歩くかな。私は押し売りは出来るんだが自然に和やかに売るのは下手だ、明らかに、商人ではないのだろう、やっぱり。十四時から十六時過まで新木場プロジェクト打合わせ。友岡社長より上海のコンテナ工場の話しを聞く。電力不足でコンテナ製造工場は夜だけしか稼働していないそうだ。新木場にメイドIN CHINAを作るこの計画は日本の建設業の流通の保守性というより守旧的体質に刺激を与える、そういう価値がある筈だ。十七時新宿のプラットホームで一〇分程の打合わせをして大江戸線で六本木へ。十七時三〇分磯崎アトリエ近くのコーヒーショップで休む。新木場プロジェクトの名前をモヴァイル・フロム・チャイナIN

TOKYOとすることに決める。コンテナの可能性を突きつめてみる。今夜は李祖原と磯崎さんに会うが、磯崎さんに聞いてみたい事がいくつかあるので楽しみである。

五月二十七日

七時起床。昨夜は十八時より磯崎さん李祖原とアトリ工近くのレストランで会食。完全なベジタリアンである李の為メニューが用意された。実にうまかった。年に何回も会う機会はないが相変わらず刺激的で広範な考えを聞くことができた。磯崎新論を磯崎さんだったらどう書くかと問うたら福田和也の安土桃山文化に關しての竹生島紀行エッセイを渡された。最近の磯さんの旅の道連れは、浅田彰に加えて福田和也が登場することが多い。建築界で話し相手になる人間は居ないのだろう。七〇代半ばにさしかかり、まだ知的に進化し続けているのは本当に驚く。私も余程しつかり精進しないと磯崎さんの背中さえ見えなくなってしまいそうだ。ハッキリと別の道を歩き始めてはいるのだが、磯崎さんと話していると勉強不足を痛感してしまう。これ程相対化思考の力を持ち合わせながら創作者のディオニソスの力オスも又あわせ持つ人は日本文化史上、稀なのではないか。ハッキリと別の道を歩かなくてはならない。

午後星の子愛児園増築現場。十四時担当者急病の為、いくつかの物件の構造打合わせの為梅沢良三先生の成城のオフィスへ。梅沢さんのオフィスは私には少しまとまり過ぎてキレイ過ぎる建築だ。もう少し構造が、赤裸々な物質性が露出していても良かったのではないか。十六時半頃修了。打合わせも全てみるのは大変だけれど一人で全部みるのもいいんじゃない。倒れるかも知れないけど、それはそれで仕方ないだろう。

夜、何となく、佐藤健の生きる者の記録を読み直す。健は本当に良く闘ったと思う。やっぱり自分をどうしても表記したかったのだ。新聞記者として良い形で残ったと思う。よくやった。

五月二十八日

私の世田谷村の特徴は先ず何よりも物質が物質として裸形に表わされているのが特徴だな。往時のブルータリズム程余計に荒々しくはなく。そのマンマの姿である。本当は昔の民家と同じたらずまいなんだけれど、それではインダストリアル・ヴァナキュラーという二〇世紀後半の概念だろうと言われかねない。ここで言う裸形の物質性というのは情報に対する主体的即応性も包含しており、その点が開放系技術論の要である。

上九一色村富士嶺聖徳寺観音堂と墓地はオウム真理教事件、特に信者たちのサティアン建築が提示した現代建築への暴力的否定（深く今の日本全体にある）へのささやかな、私の批判作業である。数日をかけて事件後の全てのサティアンをリサーチした際、えも言えぬ建築作家としての無力感を忘れる事はできない。一九九五年からすでに十年弱の年月が経ってしまった。建築物は愚鈍な物質の固まりである。文字や映像と異なるリアリティを持たざるを得ない。その愚鈍さが（私の非力もあつた）事件後十年を経てサティアン批判としての小建築を遅ればせながら建てさせた。これは遅刻の建築である。しかし、人々はもうオウム真理教事件をわすれているように思えてならない。建築は愚鈍な物質の固まりであるが故に、表現するのに手間ヒマがかかる。それ故にこそ、消えにくい。この小建築はオウム真理教事件の備忘録でもある。同時にいささかの死者達への鎮魂歌でもありたい。